

# 明治期における国語国字問題と日本人の漢学観

方 光鋭

キーワード 国語国字問題、漢字、明治、漢学観、日本

## 一．先行研究及び問題点：

日本語にとって、漢字は「不可避の他者」<sup>1</sup>であるにしても、「不幸」<sup>2</sup>であるにしても、外来語の性格を持っている。それにも関わらず、漢字はすでに日本語の不可欠の一部になっていることもまた確かである。漢字の日本伝来により、日本語の書記言語は正式に成立するようになった。それは「日本語とその文化とが実際に成立してくることを意味している」<sup>3</sup>とも考えられる。

日本人は近代以後、漢字と日本語、漢字と近代文明などの問題について様々に議論してきた。その中で、日本の近代化にとってもっとも重要な時期である明治期に、「国語国字問題」（漢字の存廃を中心とした国語改良に関する諸問題）をめぐって特に活発な議論があった。「国語国字問題」は日本人の漢字論における重要な一部分でもあれば、日本人の国家意識、漢学観、近代文明観などに深く関わった問題でもある。この問題に関する現代の研究は主に二種類に分けることが出来る。一つは言語学的視点から日本語における漢字、漢語について分析し、明治の「国語国字問題」に言及するものであり、以下のような代表的な研究がある。

### 1. 森岡健二「明治期における漢字の役割」<sup>4</sup>

明治期の使用率の高い漢語及び翻訳語として新しく作られた漢語の構成を詳しく分析し、漢語の役割、表現上の特徴などを述べている。

### 2. 土屋信一「明治期の漢字・漢語について—漢語の流行から考える—」<sup>5</sup>

統計学の研究方法を使って、明治期における日本語語彙の中に占める漢語の比率を算出し、明治期における日用文書にも会話にも漢語が流行していたという実態を指摘している。漢語の流行原因については、漢語使用層が急激に拡大したことと「これまで一部の知識層にしか理解できなかった漢語を、大衆が理解して新しい時代の変化に追いついていこうとする強い要求がそこには存在したと想像される」ことの二点をあげている。統計データと結論の間にはまだ資料

を補充し、綿密な分析を加える余地があると思えるが、統計データもまた重層な資料として活用できることが分かる。

### 3. 小林栄三郎「漢字が日本人の「認知」に及ぼしているかもしれない影響の可能性について」<sup>6</sup>

言語学の方法により、漢字の特性を詳しく分析している。著者は漢字が封建社会を担い、近代化を阻害する要因となったという説に反対し、日本の近代化の原動力の多くは翻訳によるもので、全く異質な欧米の社会制度と文化、科学、技術、産業に関する知識と経験の翻訳を可能にしたのは、日本語の漢字の形態論的及び意味論的な柔軟性または可塑性であると強調している。漢字について形態論及び意味論の立場から綿密に行われた分析は説得力がある。

もう一つは明治の「国字国語問題」を直視し、当時のインテリの論争をもとに、その歴史・社会背景、論争のプロセス、近代文明との関係などのようなアイデンティティの面について主として論じている。本稿はこちらの方法を取る。代表的な研究としては次のものが挙げられる。

#### 1. 平井昌夫『国語国字問題の歴史』<sup>7</sup>

第三章「国語の自覚と漢字への反省」、第四章「明治維新と国語国字問題」で国語国字問題の歴史を振り返りながら、この問題の背景を述べている。

#### 2. 中村哲也「明治期における国民国家形成と国語国字論の相克——国語学者上田万年の歴史的位相」<sup>8</sup>

国語国語問題をめぐり、社会の論理を先行させる西周と「国家権利を背景とした強力な行為の国語政策の優先」を主張する加藤弘之の論争を通して、明治知識人の抱えた大きなジレンマの一つである「制度革命」と「精神革命」を分析し、国語学者の上田万年の歴史的な位相を述べている。

#### 3. 佐藤喜代治『漢字と国語問題』<sup>9</sup>

「明治以後の国字問題の展開」の部分で、国字問題に関するさまざまな論説をまとめている。

国語国字改良は日本人の国語観の問題とは言え、漢字は中国から伝来し、また日中共有の文字として、最初から日本人の漢学観に緊密に繋がっているといわざるを得ない。以上の先行研究、特に後者の種類に属する研究は、明治期の「国語国字問題」の歴史背景、国家意識、漢字政策などに多少触れているが、この問題と日本人の漢学観を中心に分析する論文は管見の限りまだ存在しない。本稿では明治維新前後と日清戦争後において活発化した国字国語論を分析し、この問題と日本人の漢学観との関係を探ってみたいと思う。

## 二. 国語国語問題の背景及び要因

### 1. 江戸時代の漢字・西洋文字比較論

漢字廃止論は明治の「国語国字問題」から始まったが、漢字と西欧の文字との違いについては、既に江戸時代から指摘されていた。

中国が日本文化の源泉地として、特に江戸時代になると、儒教を官学とし、漢学は唯一絶対の文化的価値とみなされている。漢字を知ることが漢学世界に入る基礎教養として、不可欠だった。17世紀前半から江戸幕府が「鎖国政策」をとり、貿易は中国とオランダにかぎられたため、日本と西洋との情報交換はオランダを通じてしか行われてこなかった。オランダとの接触によって、次第に西洋の近代文明に触れ、蘭学者を中心に、西洋文化と東洋文化とが比較されることにより、中国文化の再認識が始まった。この中に漢字についての認識も含まれている。

1713年に新井白石は『西洋記聞』<sup>10</sup>の中で漢字と西洋文字を比較している。西洋文字について「その字母、僅かに二十余字、一切の音を貫けり。文省き、義広くして、その妙天下に遺音なし」（中略）「漢の文字万有余、強識の人にあらざしては、暗記すべからず。しかれども、猶声ありて、字なきあり。さらばまた多しといへども、尽かさざる所あり。徒に其心力を費すのみといふ。」と述べた。

この後、後藤梨春（本草学者）、森島中良のような蘭学に関心を持った人々が西洋文字・漢字の比較について言及することが多くなった。以上の引用にも分かるように、単なる漢字と西洋文字の比較だけではなく、西洋文字に対して「その妙天下に遺音なし」というような賛辞も贈られるようになった。もちろん、当時の漢字と西洋文字との比較論はまだ世の中に広く知られることのない個人意見のレベルにとどまっている。漢字廃止論の原型と見ることができる漢字・西洋文字比較論は最初から日本人の対外意識、西洋文明への憧れに伴って生まれてきたといえる。しかし、それが漢字廃止論にまで発展するには一世紀半かかった。

### 2. 最初の漢字廃止論「漢字御廃止之儀」

「国語国字」という語が表わすように、「国語国字問題」の発生は、先ず「国語」の意識の確立と大きく関わっている。「国語」の意識は国家意識の成立に応じて成長してきた。要するに「国語国字問題」はもとより日本人のアイデンティティーに関する問題であって、そういう意味で、日本が自己認識・国家意識に

目覚めた明治期に、この問題が盛んに論じられるようになったことは当然であろう。

慶応二年（1866年）、前島密は「漢字御廃止之儀」を徳川十五代将軍慶喜に建白し、日本最初の漢字廃止論者になった。その後、「明治維新をキッカケとして、漢字批判という個人的意見が国語国字問題という社会的民論の性質をおびるようになった。」<sup>11</sup> 中国から伝わってきた漢字、漢学の過度の尊敬という日本人の伝統的観念に対し、自覚的反省が始まったのである。

まず、最初の漢字廃止論である「漢字御廃止之儀」<sup>12</sup>はどのようなものか見てみよう。

「漢字御廃止之儀」では「教育普及」という問題提起とともに、「教育は士民を論ぜず国民に普からしめ、之を普からしめんには成る可く簡易なる文字文章を用ひざる可からず」と書かれている。また、全文の約四分の一の紙面を費して、東洋が西洋に遅れる原因について次のように分析している。

「中古人の無見識なる彼国の文物の輸入と同じく、此不便無益なる形象文字をも輸入して、(中略)恐多くも御国人の知識此の如くに下劣にして、御国力の此の如くに不振にいたりたるは、遠く其原因を推せば其素の毒を茲に発したるなり……彼の煩雜不便字内無二なる漢字を用ひ、句法語格の不自由なる難解多謬の漢字に抛り、普通の教育を為すが如し、此の活発なる知力を有する日本人民にして此の貧弱の有様に屈し居るは、全く支那字の頑毒に深く感染して、其精神を麻痺せるあり」。<sup>13</sup>

ここで述べられる「句法語格」は言うまでもなく西洋語の発想から来た表現で、日本への伝来がすでに長く、日本語の一部分になっている漢語が西洋語と比較されて非難されている。最初に「漢字」と書いて、後に「支那字」と書き換え、「輸入」という語が二度も使用され、日本と中国との異質性が強調されている。また日本の国力不振の原因は全部漢字のせいとされている。新井白石の比較論が西洋文字への憧れを含んでいたのに対し、前島はすでに、漢字を心から恨んでおり、漢字への嫌悪感が紙面からにじみ出ている。

また、前島によれば、日本人の愛国心の欠如の原因も漢学にあるとされ、「愛国心」、「学問の独立」が唱えられている。

「愛国心の如きは是等の種族中には絶えて影だに映出致せし事は有之間敷奉存候、其上等なるものに於いては先づ四書五経の素読より支那の歴史に相渡り、文物制度より治乱興敗の蹟を講じ候にて、御国の古典歴史の如き

課外の業に附し去りて、之を知るも知らざるも教育上には関係無きは一般に御座候、故に彼を尊み己を卑むる病は早く已に彼等の脳裏に感染し、愛国心を傷け候（中略）自国の言語を以て教授し、（即ち学問の独立）少年輩の心脳をして愛我自尊の礎を固めしむること甚だ肝要の事と奉存候」<sup>14</sup>

（中国の歴史、文物制度）「これを知るも知らざるも教育上には関係無き」、「彼を尊み己を卑むる病」、「愛国心」、「愛我自尊」、「自国の言語を以て教授」などの表現から分かるように、前島の漢字批判の原因は漢字の「不自由」、「難解多謬」にあるというよりは「国語意識」、「国家意識」がもっと強く感じられる。

また、「漢字御廃止之儀」の中で前島は「西人某」の談話を引用し、日本人の「大和魂」（愛国心）に関する憂慮を次のように述べている。

従来漢学を以て学問教育の基本とするゆゑ、一種の支那魂ありて大和魂（愛国心）に乏しい、晩近に至りて漸く西洋学を為す者増加せるゆゑ、早く学問の順叙を改正して之を制せざれば、他日は自ら一種の西洋魂を輸入して、不可謂の葛藤を起こし、其極大和魂を皆無にすべしと

ここでは、「大和魂」、「支那魂」、「西洋魂」という三つの「魂」が言及されているが、三者の関係には前島を含めた明治時代のインテリ層のジレンマがよく現われている。この三つの「魂」をめぐる葛藤はずっと日本の近代化の過程と絡んでおり、日清戦争後、東洋における政治的力関係の逆転により、表面化するようになった。この問題については後で詳しく論ずる。

したがって、幕末から次第に国語国字論が盛んになった要因としては、1) 文明開化の切実な要請、2) 西洋、中国、日本という三者の力関係の変化、3) 漢字へのコンプレックスの三点から考えたらよいだろう。

### 1) 日本文明開化の切実な要請

「漢字の御廃止之儀」が提出された1866年はちょうど明治維新の前夜にあたる。法律、制度、学問、技術など西洋文明の全般を国民全体に普及させるには言語を媒介とする必要があり、「国字」を改良し、簡単、便利にすることが急務であった。日本と同じように、中国でも1917年から1921年にかけて展開された「新文化運動」は、それをきっかけとして国語改良運動につながった。そこでは科学と民主主義を標榜し、中国革命を妨げる儒教的、封建的文化や制度が批

判された。思想文化論争の後、国語領域の改良論も相次いで起こり、漢字の煩雑不便もよく論じられている。銭玄同、魯迅などは日本に留学し、帰国した後、「五四運動」の主役になった。魯迅は「中国文と中国人」（1933年10月）という雑文で、漢文に詳しいスウェーデン人カールグレン（Karlgrén）の話を引用し、魯迅流の皮肉を込めて「中国文字は美しくて、愛らしい貴婦人のようだ、西洋文字は実用的だが、美しくない下女のようだ」と漢字の実用性の欠如について批判している。<sup>15</sup>

また、魯迅は「新文字について——質問に答える」で次のように述べている。

四角い漢字は、本当に愚民政策の利器である。働く大衆が学習し、会得する可能性がないばかりでなく、金も勢力もある特権階級でさえ、十年、二十年かけて、結局、物にならない文字が大変多い。（中略）だから、漢字は中国の働く大衆の身体に巣くう結核でもある。病菌が内部に潜伏していて、まっさきにそれを取り除かないなら、結果は、自分が死ぬより仕方がない。<sup>16</sup>

魯迅の考え方は前島の言及した漢字の煩雑、漢字の習得に時間がかかること、中国の衰弱の原因が漢字にあること（この考え方は明治以後の国字論の定番になった）などの内容と重なる部分がある。もちろん魯迅は1902年から1909年まで、ちょうど日本で国字国語問題が盛んに論じられた時期に留学しているので、影響を受けたことも考えられるかもしれない。そうだととしても、魯迅の考えはやはり当時の中国人の漢字観をある程度反映しているように思われる。中国の旧漢字は筆画が多く、文章語と口語はかなり異なっていたので、様々な不便をもたらしたことは事実である。こういう意味で考えれば、日本人の漢字批判の原因は対漢学、中国認識に緊密に関わっているが、すべてこれに帰するのはやはり安易にすぎるであろう。近代化への切実な要請を一つの大きな要因として考えなければならないと思う。

## 2) 西洋、中国、日本という三者の力関係の変化

「江戸時代の末まで、漢字の権威は隔絶していた。また、その用法はほぼ安定しており、一般に用いられる語彙にさしたる増減はなかった。」<sup>17</sup>しかし「明治以後、漢語の使用が一時的に流行し、日用文書に会話に、漢語を混ぜている。」<sup>18</sup>その原因は全面的な西洋化を目指す日本の国家的な大運動の中で、西洋語の翻訳語としての漢語が洪水のように溢れていたからである。ところが、漢籍に典故をもつ翻訳語が大量に使われる一方で、漢字廃止運動も盛んに行われた。要

するに、漢語は日本の西洋化を媒介したにも関わらず、嫌われた。なぜこうした矛盾する現象が生じたのだろうか。この時代の漢字は日本にとって、単なる書記記号としての意味を持つだけでなく、ある程度まで、「支那魂」を代表するものと見なされ、批判、排斥、排除の的になったのである。というのは19世紀の後半から、西洋、日本、中国の力関係が徐々に変化したことにより、「学問の独立」<sup>19</sup>を実現し、「他の列強と並立せしめられ」<sup>20</sup>、次第に、中国色に染められたもの、「支那魂」をすべて徹底的に捨て去ろうとし始めた。漢字が中国色のもっとも深いものの一つとして、批判されるのは当然であろう。

### 3) 漢字へのコンプレックス

漢字は日本がまだ書記文字を持たない時代に中国から日本に伝来し、中国文化に憧れていた古い時代には、漢字の使用は一種のステータスシンボルとして、使用者の矜持と結びついていた。日本と中国との力関係が逆転するにつれて、漢字は進んだ文化という象徴的な意味を失っていく。それに加えて幕末から日本のナショナリズムが台頭し、維新の前夜はちょうどこのような排外感情が高まっていた時期と言えるだろう。

## 三. 『明六雑誌』と『太陽』における国字国語問題をめぐる論争

明治維新後、国語国字論が一層盛んになった。以下では明治七年創刊の明六社<sup>21</sup>（この社の人々は各各思想を異にしていたが、同じ社の下に集まり、明治初年の学界を指導し、思想界の混沌時代によく人心の啓蒙に勤めた）の機関紙『明六雑誌』と日清戦争の発生した明治二十七年末創刊の日本最初の総合雑誌『太陽』に掲載されたこの関連の論説（大体第一巻——第七巻に集中する）を中心にこの問題を具体的に分析していきたい。

題名	雑誌名	日付	作者
1. 「洋字ヲ以テ国語ヲ書スルノ論」	明六雑誌 (第一号)	1874年3月	西 周 (思想家)
2. 「開化ノ度に因テ改文字ヲ発スベキノ論」	明六雑誌 (第一号)	1874年3月	西村 茂樹 (啓蒙思想家)
3. 「平仮名ノ説」	明六雑誌 (第七号)	1874年3月	清水卯三郎
4. 「質疑一則」	明六雑誌 (第十号)	1874年6月	阪谷 素

5. 「漢字の利害」	『太陽』 (第一巻 第一号)	1895年	三宅 雪嶺 (哲学者、評論家、国粹主義者)
6. 「文学上の新事業」	『太陽』 第一巻第三号	1895年	大西 祝 (哲学者、評論家)
7. 「国字を論ず」	『太陽』 第一巻第五号	1895年	三宅 雪嶺 (哲学者、評論家、国粹主義者)
8. 「欧州諸国における綴字改良論」	『太陽』 第一巻第七号	1895年	上田万年 (国語学者、言語学者)
9. 「国字改良論」	『太陽』 第四巻第十九号	1898年	井上哲次郎 (哲学者)
10. 「国字改良論(承前)」	『太陽』 第四巻第二十号	1898年	井上哲次郎 (哲学者)
11. 「国字改良論」	『太陽』 第六巻第三号	1900年	西村 茂樹 (啓蒙思想家)
12. 「漢学及び儒学」	『太陽』 第六巻第六号	1900年	島田 三郎 (政治家、ジャーナリスト、官僚)
13. 「漢字存廃問題について」	『太陽』 第六巻第九号	1900年	井上 円了 哲学者、教育家
14. 「国字改良論」	『太陽』 第七巻第二号	1901年	久米 邦武 (歴史学者)
15. 「文部省の事業」	『太陽』 第七巻第三号	1901年	大町 桂月 (詩人、歌人、随筆家、評論家)
16. 「ローマ字変革論」	『太陽』 第七巻第三号	1901年	神保 小虎 (理学博士)

以上のリストから分かるように、著者の身分・職業は相当幅広い領域にわたる。国語国字問題は直接的には言語問題であるとは言え、以上の論者の中で上田万年以外には本格的な言語学者はいない。これも当時の国字国語問題が言語問題だけにとどまらないことを裏付けている。ここで注意したいのは、以上の論者の中に、とりわけ明六社のメンバーで通称洋学者といわれる人々が多く含まれているが、彼らのほとんどが相当深い漢学の素養の上に洋学を学んだというのが実情であり、単純に洋・漢に分けて考えない方がよかろう。批判や自覚はすでにあるもののうちにそのまま安心しきつている限り生まれようはずがない。すでにあるものが自己矛盾を起こし、またすでにあるものと新しくあろうとするものとの比較・対照が意識されるようになって初めて生まれる。こういう意味で、新しい力と古い力の激しい衝突が国語国字論の裏に潜んでいる。



### (一)『明六雑誌』における国語国字問題

内容から言えば、明治維新後の早い時期に『明六雑誌』に掲載された論説では、「終ニハ彼ノ文明ヲ羨ミ我カ不開化ヲ嘆シ果テ果テハ人民ノ愚如何トモスルナシト言フ」<sup>22</sup>、「方今ノ勢欧州ノ習俗我ニ入ル其多キニ居ル勢亦建瓶ノ如キアリ衣服ナリ飲食ナリ居住ナリ法律ナリ政事ナリ風俗ナリ其他百工學術ニ至ルマテ彼ニ採ルニ向ハサル者莫シ」<sup>23</sup>など一刻も早く現状を改善し、とにかくすべてを西洋風に変えようという雰囲気漂っている。国語国字をめぐる漢字廃止論、漢字節減論（制限論）、ローマ字論、仮名論、英字論、世界語論など様々な論説があったが、客観的に漢字の利害を分析し、具体的な改良案を提出しようとした学者は少なかった。多岐にわたる論説の存在そのものが、明治日本の思想界の活発さあるいは多様さを明らかに示すものといえるだろう。其の中で、漢洋両文化に通じた西村茂樹の論説は、どちらにも偏らず、より冷静で、漢字と歴史、古典の関係についても指摘している。特に「方今ノ急務ハ国学漢学洋学ノ差別ナク唯国民ヲシテ一人モ多ク学問ニ志サシムルニアリ」と述べられ、「国学漢学洋学の差別ナク」という時節に左右されない意見を出している。

「明六雑誌」には掲載されていないが、明六社の重要なメンバーである森有礼と福沢諭吉も国字国語問題について文章を書いていた。

森有礼の考えは、アメリカで刊行した英文著書『日本の教育』（1873年）、特にその中の米国の学者ホイットニーに宛てた手紙に見える。そこでは、森は「我国の最も教育のある人々及び最も深く思索する人々は、音標文字に対する憧れを持ち、ヨーロッパ語のどれかを将来の日本語として採用するのでなければ、世界の先進国と足並をそろえて進んでゆくことは不可能だと考えている」と述べている。これに対して、ホイットニーは、言語はその種族の魂と直接に結びついたものであるから、そう安易に放棄するなどと言ってはならない、と森に忠告した。森はまた、言語だけではなく人種も変えるべきであると唱え、日本の優秀な青年たちはアメリカへ行って、アメリカの女性と結婚して連れ帰り、体質・頭脳とともに優秀な後代を生まれよと勧めている。

今日、こういう話を聞くと、とても日本の文相になった人の主張とは思われないが、かえってそこに国字国語が論じられた当時の状況を如実にうかがうことができる。

福沢諭吉は1873年11月、「文字之教」<sup>24</sup>を書いている。「日本に仮名の文字ありながら漢字を交へ用いるは甚だ不都合なれども、往古よりの仕来りにて全国日用の書に皆用いるの風と偽りたれば、今俄かにこれを廃せんとするもまた不都合なり。今日の処にては都合と不都合と持ち合いにて、不都合ながら用を便ずるの有様なるゆへ、漢字を全く廃するの説は願ふ可くして俄かに行はれ難きこ

となり。」

福沢の「不都合」の論が正しいかどうかは別として、基本的な出発点は実用主義に立って当時の漢字制限論を代表する点で、西村茂樹と似ている。福沢は欧化主義の代表人物と見られ、漢学、漢字批判の文章も多量に書いているが、彼の漢字論はそれほど偏らず、後の漢字政策はほぼ福沢の漢字制限論と同じ方向を辿った。

## (二)『太陽』における国語国字問題

『太陽』に掲載された国語国字問題をめぐる論争を見ると、漢字の是非をめぐる論拠として、儒教、漢学に言及するものがもっと多くなっている。その中、漢学に対して「排斥」と「反排斥」の全く異なる二種類の声が響いており、「多様性」と「再認識」の二つのキーワードにまとめられる。

### 1. 多様性：

井上哲次郎は「戦争後の学術」の中で、「支那古代の哲学、文学などの日本人に取つて有益なることは支那に打ち勝つたる後も少しも変わるべき事はないです（中略）（支那の古代文学は）他国の文学ではあるがこれは我国の文学といふも殆んど無理でもない様になつて居ります、さうしてまた印度思想、支那思想中に於いて甚だ高尚なる元素がある、殊にまだ西洋に無い処の一種の思想がありますからして決して是等は排斥し得らるるものではない」<sup>25</sup>と述べ、「他国」の中国古典は「我国」の文学として愛し、支那の敗戦にも関わらず、支那思想中の「高尚なる元素」を認めている。同様に、「漢字漢文の我国に於けるは、恰も希臘拉丁の言語文章が、英佛諸国の言語文章におけるが如し」<sup>26</sup>と古典視する論説が漢字・漢語支持論の中に多数見られ、『太陽』以外にも、同時代の田岡嶺雲など「新漢学者」たちにこれと共通する認識が見られる。<sup>27</sup>

また、哲学者井上円了「漢字存廃問題に就いて」では、「哲学館中に東洋専門部の学科を設け其準備として漢学専修科を開設せり蓋し其本意は我邦の制度文物より百般の事に至るまで漢字漢文を待たざれば知るべからず故に漢字漢文を専修する道を開くは実に急務中の急務なり」と漢字漢文の保持説が唱えられている。

他方、以上と全く違って、「その文に漢文の素養からして自ら骨が通っており、美文長詩などには漢詩の影響を強く受けた」<sup>28</sup>大町桂月は漢文・漢学と国語の異質性を強く強調し、漢文を外国語として捉えるようになってもいる。大町は「文部省の事業」の中で、「漢文漢学は我が国に入りて幾んど二千年の久しきに及び、国民に親密なれども、漢文は矢張り漢文也、国文に非ず、これを第二

の国文と云ふは可也、決して国文と同一に見るべきものにあらざるなり。(中略)我が国にて一時、変則の英学といふこと流行せり。即ち英語の正しき発音を学ばずして、直訳にて訓むこと也。直訳にて英文をよむは、なほ今日吾人の漢文を訓むが如し。」<sup>29</sup>と述べ、「漢文漢学」と「英文」とをほぼ等置している。

過激な論の中に、保守的な論が同時に存在するのはやはり同時代の特色の一つである。

## 2. 再認識：

### (1)漢字の再認識

論説の中では漢字が漢文学問そのものであるわけではなく、「機械」にすぎないという再認識が漢字批判のほぼ共通した論拠になっている。例えば、次のような見解が見られる。

ただ単に機械に過ぎざる文字を記憶するために、無益の労力と時間を増やすの難を免れ、単刀直入、人生に必要な学問を修習し、迂回せる路に寄らずして、その目的に到達するを得ればなり(後略)<sup>30</sup>

学問とは漢文を学ぶ義と解せられ、多数の漢字を記憶し、難解の漢文を読みえる者は、学者、知者と名つけらるるに至れり、是れ現来の趣旨に非ず、目的に達する手段が、変じて目的其の本と為れるなり。<sup>31</sup>

### (2)孔子の再認識

国語国語問題をめぐり、漢字・漢文批判とともに、儒学の祖である孔子も批判されているが、日清戦争後は孔子を再認識する流れも生じ、攻撃もせず、神聖化もせず、中庸的に評価している。島田三郎は次のように述べている。

後代の儒者孔子を祖述すと称して、孔子の一言一句を、人類の極致の知識と為し、是を標準として、万事を規せんとするは、孔子の真意を誤解し、確かに其の面目を損傷する者なり、孔子は後生畏れる可しと曰ひて、自己の知識を極致となさざりき、(中略)孔子の心術光名、言行一致、命に安じて職を守り、天を怨みず、人をとがめず、中庸を尚びて奇癖を行はず、(中略)彼れは漢土周代に於ける大知識なり、然れ共日本明治の社会に於ける知識の標準に非ず、然れ共其の人格と高德は、確かに百代の師表なり後世の儒者此区別を混じて、孔子の糟粕に酔ひ、旧知を以て新知を拒まんと欲し、これに反して儒者の陋を病む者は、糞に懲りて薺を吹き、儒学を滅し漢学を一掃せんとす、二者ともに過てり、その過失は儒学及び漢学に対す

る、適当の見解になき原づかずんばあらず<sup>32</sup>

島田は孔子についての誤解を指摘することにより、「旧知を以て新知を拒まんと欲し」、「孔子の糟粕に酔」うこと、「儒学を滅し漢学を一掃せんとす」ることの二つをとともに極論として批判し、孔子の論説を明治の「文明開化」の時代特徴に合わせて解釈し、再評価している。

### 3. 日清戦争後における漢文、漢学の再生

国字国語問題に関した論説の中には、漢字とともに漢学も一緒に廃止しよう、国語を全部英字に変えようなどの過激な意見が多かったが、上掲リストの後半、特に日清戦争中及び日清戦争後の『太陽』には意外にも以前より冷静なもの、保守的なもの、ひいては以前に反して、漢学の価値を改めて認めるものが多くなった。漢字の廃止論であれ、保存論であれ、漢学の再認識であれ、批判であれ、いずれもこれまでとは異なる形で漢字、漢学が注目されている。したがって、明治時代の後半、特に日清戦争以後はむしろ東洋文化に対する関心が高まりつつあったことが分かる。なぜ日中の政治的力が逆転した日清戦争後、かえって漢文・漢学が注目されるようになったのか、また実際に明治三十年代以後に、儒学、漢学の復興運動さえまで起こり、漢字漢文の廃止運動は成功しなかった。

三浦叶は『明治の漢学』<sup>33</sup>でこの問題の内面的な要因を次のように分析している。

- (1)井上哲次郎「儒教の長所短所」に述べられるように、漢学の基礎を学んだ人々が、その後洋学を経て、近年になって再び漢学に関心を持ち、儒教復活論を唱えている。
- (2)教育勅語を物足りなく感じる人々が、その根底ともなる、もう少し広汎な原理を求めて、以前の儒教に行き着き、勅語の足りない所を補充するものとして、これを唱えている。
- (3)佛教や基督教に頼らない人が自身の拠り所として唱えている。
- (4)日清戦争後、日本が中国に代わって世界に進出し、西洋に対し東洋を背負って立つという自覚の下に、漢学を保持しようという考える人々もいた。

(1)の原因については、漢学の基礎を学んだ人々が再び漢学に関心を持った原因は、はっきり解釈されていない。日清戦争後、儒教復興を唱える人が増えたのは漢学の後継者が次第に少なくなってきたという危機感も一つの原因だろう。田岡嶺雲は「漢学復興」で「年々歳々花相同じ、歳々年々人同じからず、前人は逝き後人は老ゆ、(中略)今や当代漢学のき宿髮華を致す、しかして近年

また逝く者殊に頻々。」と述べ、「漢学の系統なるもの、それ今日に絶えん。」と日本の漢学の現状を憂えながら漢学の復興を訴えている。

(2)は、教育勅語との関連で言及されているが、明治以後の「五ヶ条ノ御誓文」、「学制」、「教育大旨」、「教育ニ関スル勅語」などの一連の教育に関する勅語、政策及び輿論と漢学復興との関係もまたまだはっきり分析されていない。

明治元年3月、明治政府は、欧米の文明を取り入れ、近代国家づくりの体制整備を急ぐことを国民に告げ、特に欧米文化の受け皿となる教育を重視して、「五ヶ条ノ御誓文」を公布した。第四条、「旧来の陋習ヲ破リ天地ノ公道ニ基クヘシ」には改革への意気込みが表れている。第五条「智識ヲ世界ニ求メ大ニ皇基ヲ振起スヘシ」では「世界ニ求メ」と強調され、明治元年の「世界」とは、東洋ではなく、西洋を指していた。教育制度上で、従来の漢学、儒教の絶対な地位が崩れ始めた。

明治五年八月に「学制」が頒布された。「太政官公告」（「学制序文」）には「士人以上の稀に学ぶものも動もすれば国家の為にすも唱へ身を立てるの基たるを知らずして或いは詞章記誦の末にはしり空理虚談の途に陥り其論高尚に似ず是すなわち沿襲の習弊にして文明普ねからず才能の長ぜずして貧乏破産喪家の徒多きゆゑなり是故に人たるものは学ばずんばるべからず」と書かれている。ここでは、「学制」が頒布される前の明治四年七月に、廃藩置県が行われて、大勢の武士が職も身分も失った。当時の社会背景を思い起こす必要があるだろう。「才能の長ぜずして貧乏破産喪家の徒多き」というのは士族の漢学の素養が「詞章記誦の末にはしり空理虚談の途に陥」っていたため、明治の新しい状況に役立てることができなかったことを指している。

しかし、儒教精神を排し欧米思想を取り入れた「学制」の近代教育方針はその後、欧米の智識や技術の消化だけに力を入れた実学主義が実生活から遊離していると批判され、明治十二年に「教学大旨」が発布された。

「教学大旨」では「教学の要仁義忠孝ヲ明カニシテ智識才芸ヲ究メ以テ人道ヲ尽スハ我祖訓国典ノ大旨上下一般ノ教トスル所ナリ」、「自今以往祖宗ノ訓典ニ基ヅキ専ラ仁義忠孝ヲ明カニシテ徳ノ学ハ孔子ヲ主トシテ人々誠実品行ヲ尚トヒ」と述べ、儒教の「仁義忠孝」が「我祖訓国典」として強調され、儒教をベースにした教育方針に戻るのである。

明治以後の教育方針は西洋に傾いたり、従来の儒教に戻ったりして、激しく動揺している。この一連の国家教育方針の公布によって、明治のインテリア層の間でもこの問題をめぐって、様々な議論が行われている。例えば、福沢諭吉『教育余談』、加藤弘之『德育方案』、西村茂樹『日本道德論』等が挙げられる。議論は主に、日本近代国家の西洋道德観と東洋儒学のいずれに基づくべきかと

いった問題をめぐって展開されている。明治期を通じて、こうした議論は常に盛んだった。それは多くの人々に儒学、漢学に対する関心呼び起こし、明治後半には遂に儒学の復興期が訪れる。その結果、漢字、漢文廃止論はその根拠を失い、消滅するのである。

(3)の宗教問題は道德観の問題に属し、教育方針をめぐる議論に含まれた道德教育、道德観と重なっているので、省略する。

(4)はこの四つの原因の中で、一番決定的なものであり、上掲の「西洋魂」、「支那魂」、「大和魂」つまり西洋、中国、日本の三者関係に緊密に関わっている。近代以後の日本の中国観（漢学観は中国観の中で非常に大切な部分である）は常に、西洋、日本、中国三者の力関係の中で形成され、その力関係の変化に左右されている。日清戦争以前、日本の国力が強くなりつつあるが、まだ西欧列強と対抗しうる力を持たなかった時代は、「大和魂」つまり自己認識が高揚し、「大和魂」と「支那魂」の争いは主に意識され、国語か漢語かの問題が顕在化する。日清戦争後には、日本が東洋において圧倒的な存在になると同時に、次第に西洋列強に並ぶ国力を持つようになる。つまり「大和魂」を吸収してこれを支配し「大和魂」と「西洋魂」との争いになる。二つの場合とも、日本の国力の増強、国家意識、ナショナリズムの台頭と並行する現象である。具体的に言えば、日清戦争後、中国の現状、国力の衰微が世界に知られるようになり、虚弱な老大帝国は崩壊寸前の危機にさらされた。それとは対照的に、日本の国勢は延び、その存在は世界的に知られるようになり、日本は国家の新しい構えをアピールする必要があった。当時の漢字漢語問題はこのような背景において生じたのである。

#### 四. 終わりに

幕末から特に日清戦争後、日本社会では現実の中国を軽蔑する風潮が圧倒的に強まった。このような背景において、文明開化を目指し、教育普及、殖産興業などの社会的要請に応じて、国字国語も改良に迫られ、国力の衰えた中国と因縁深い漢字・漢語への批判も免れえないことになった。幕末から日清戦争まで、日本人の中国イメージはますます悪化し、日清戦争後、日本の勝利により、中国軽視の風潮はいっそう強くなった。だが、それに反して、以上の諸論説を見る限り、日清戦争後の日本社会、少なくとも日本の学界、インテリ層には漢字・漢学に対して、多様な考え方が存在している。現実の中国に対する軽視と漢文、漢学など中国の古典に対する評価は分裂し、後者に対してはある程度客

観的な眼を持ち続けているともいえる。言い換えれば、国字国語論が支那輕蔑、脱漢学、支那魂からの離反という背景から生まれながら、長い論争を経て、「漢語漢文は希臘拉丁の言語文章の如し」のように、漢学に対する柔軟な姿勢が見られるようになった。

### 注：

- 1 子安宣邦『漢字論—不可欠の他者』岩波書店、2003年5月、p.14
- 2 同上、p.15
- 3 同上、p.14
- 4 森岡健二「明治期における漢字の役割」、『言語生活378』筑摩書房、1983年6月、p.44-45.
- 5 土屋信一「明治期の漢字・漢語について—漢語の流行から考える—」、『共立国際文化21』共立女子学園共立女子大学国際文化部、2004年、p.23-30.
- 6 小林栄三郎「漢字が日本人の「認知」に及ぼしているかもしれない影響の可能性について」、『慶応義塾大学日吉紀要ドイツ語学・文学』、1986年10月、p.1-25.
- 7 平井昌夫『国語国字問題の歴史』三元社、1998年2月
- 8 中村哲也「明治期における国民国家形成と国語国字論の相克—国語学者上田万年の歴史的位相」、『東京大学教育学部紀27』、1987年、p.207-216.
- 9 佐藤喜代治「漢字と国語問題」、『大倉山論集』36 大倉山精神文化研究所1994年12月、p.1-45.
- 10 新井白石「西洋記聞」、『新井白石 日本思想大系35』岩波書店、1975年
- 11 平井昌夫『国語国字問題の歴史』三元社、1998年、p.155.
- 12 前島密『鴻爪痕 前島密伝』財団法人前島会、大正9年、p.153-158.
- 13 同上、p.155.
- 14 同上、p.157.
- 15 丸山 昇 訳（代表）『魯迅全集7 偽自由書・準風月談・花辺文学』学習研究社、昭和六十一年、P.339.
- 16 今村与志雄訳『魯迅全集8 且介亭雜文・且介亭雜文二集・且介亭雜文末編』学習研究社、昭和61年
- 17 高島俊男『漢字と日本人』文芸春秋、平成13年10月 P.128.
- 18 土屋信一「明治期の漢字・漢語について—漢語の流行から考える—」、『共立国際文化21』共立女子学園共立女子大学国際文化部、2004年、p.23.

- 19 前島密『鴻爪痕 前島密伝』財団法人前島会、大正9年、p.157.
- 20 同上、p.157.
- 21 「明治六社」の人々は各各思想を異にしていたが、同じ社の下に集まり、明治初年の学界を指導し、思想界の混沌時代によく人心の啓蒙に勤めた。
- 22 西周「洋字ヲ以テ国語ヲ書スルノ論」、『明六雜誌』第一号博文館、1974年3月
- 23 同上
- 23 井上哲次郎「戦争後の学術」、『太陽』第一卷博文館、1985年
- 24 伊藤整編『日本現代文学全集2』、講談社1962年2月、p.83.
- 25 井上哲次郎「戦争後の学術」、『太陽』第一卷第一号博文館、1974年3月、p.16-17.
- 26 同上
- 27 田岡嶺雲「漢学復興」、西田勝編『田岡嶺雲全集』第一卷、法政大学、p.563.
- 28 三浦叶『明治の漢学』汲古書院、1998年、p.154.
- 29 大町桂月「文部省の事業」、『太陽』第七卷第三号 博文館、1901年、p.54. 55.
- 30 井上哲次郎「国字改良論（承前）」、『太陽』第四卷第二十个、p.6.
- 31 島田三郎「漢学及び儒学」、『太陽』第六卷第六号博文館、1900年、p.2.
- 32 同上、p.4.
- 33 三浦叶『明治の漢学』、汲古書院、1998年、p.26 p.44.